

刊行にあたって

國學院大學学術フロンティア運営委員会

委員長 杉山 林継（日本文化研究所所長）

第1段階の5年が終わった。すぐに申請して第2段階へ入りたいと考えたが、大学の渋谷再開発計画が進行中で、これと合わせるためには2・3年のずれが生じてきた。同時に第2段階を、これまでのものをベースとしながらも、飛躍的に新しいものとするためには、準備が間に合わなかったことも事実であった。

平成10年度に文系にこの学術フロンティアの事業が当時の文部省によって開かれた時、大学人の内でも事の重要性を理解している人は残念ながら少なかった。既に理科系ではこれ以前から実行されていたのであるが年度途中の実施に応募することができず、平成11年度に申請したのであった。一方、本学ではこの時まで、拠点を渋谷に集中化する計画も、渋谷の再開発計画も本格化していない状況であり、昭和32年建設の老朽化した校舎の建て直しも進行していなかった。そのような中で、一部施設の改造による研究室増設によって、事業を興すことにした。最小の施設で最大と言わないまでも大きな成果をあげてこられたのは前学長阿部美哉氏のリーダーシップによる所が大きかったし、当研究所のこれまでの累積があったことにもよる。

大学が高等教育の場であると同時に最新の研究をする場でありその研究を開発する時に若手を養成していく、特に研究を中心とした大学院大学の拡充は、大学の足腰を強くする必須の条件であり、その後文部科学省が全額補助金による21世紀COEプログラムを組み、国立大学の民営化時代とも重なって大学存続問題とも合せ考えられるようになって始めて、今後の大学のあり方、国の大学助成の方向性が認識されはじめた。

國學院大學がこれまでに築いて来た学問は、日本的なものの考え方であり、日本人のあり方であった。創立以来120年という近・現代を私立の大学で小さいながらも日本一を維持して来られたのは、その中核にこの学問があり、神道という日本的生きざまを幅広く追求して来たからと言えよう。

これから新しい学問も望まれるところだが、これまでの膨大な学術資料は活かして使わなければならない。大学における学術資産であり財産であるこれらの運用は、今後の研究者養成のための重要な部分を占めることになる。

小規模ではあったがこの5年間にその学術資産のごく一部であり、現代人でも理解できる画像という問題をとりあげて、その今風なデジタル化、あるいはインターネットによる利用など自分たちの研究だけでなく、開かれたデータとして活用に耐えうるものと検討し、実行化して来た。この方法論を次期には、多量の文書、記録、絵画、民俗、考古等々様々な媒体によるデータ利用の基礎として演繹して行くことによって、さらには共同研究機関等の連携を密にすることによって、全国的にネットワークを拡め、研究活動の拠点となることを考えて行きたい。

ともかく、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業 - 学術フロンティア推進事業の補助金を受けられた効果は本学本所にとって大きなものであった。

この事業によって、21世紀COEプログラムと合せて、大学院生を中心とする若手研究者が活力を得て動き出していることは事実である。この力をさらに飛躍させることをおし進めなければならない。

平成16年5月1日